

〈研究論文〉

# 予科練をめぐる集合的記憶の形成過程

——第二次世界大戦後における茨城県稲敷郡阿見町の地域変容に着目して——

白 岩 伸 也

## 予科練をめぐる集合的記憶の形成過程

——第二次世界大戦後における茨城県稲敷郡阿見町の地域変容に着目して——

白 岩 伸 也

はじめに——本稿の目的と対象

茨城県稲敷郡阿見町は、霞ヶ浦海軍航空隊と土浦海軍航空隊がおかれた海軍揺籃の地として知られる。海軍飛行予科練習生、通称予科練は、1939(昭和14)年に横須賀海軍航空隊から霞ヶ浦海軍航空隊へ移転し、1940(昭和15)年には土浦海軍航空隊に移った<sup>①)</sup>。1943年に予科練の歌として作曲された「若鷺の歌」の歌詞には「霞ヶ浦」が挿入されたり、土浦海軍航空隊の予科練を舞台とした映画「決戦の天空へ」が上映されたりすると、この地は予科練の町として注目されるようになる。だが、1945年3月の海軍施設を標的とした空襲、6月の予科練での教育・訓練の中止、9月の占領軍の進駐を経て、予科練に関する制度は廃止され、阿見町の関連施設も解体されていった。

敗戦と占領によって、阿見町から予科練は消失したかのように見える。しかし、第二次世界大戦後における阿見町の動向をたどってみると、1960年代に予科練の戦死者を慰霊するための碑が建てられ、かれらに関する資料を展示する記念館も建設されている。これによって、第二次大戦後の阿見町では、記憶としての予科練が再構成されていったのではないだろうか。

そこで本稿では、第二次大戦後に阿見町が変容していく過程をたどりながら、予科練をめぐる集合的記憶がどのように形成されてきたのかを明らかにする。そのために、はじめに、集合的記憶とその先行研究について検討し、分析の

枠組みを定める。それをふまえて、分析対象である予科練や阿見町に関する研究を整理し、着目する点を示したい。

集合的記憶とは、フランスの社会学者モーリス・アルヴァックスによって提唱された概念である。アルヴァックスは、「私だけが近づくことのできる脳のなかや心の隅に記憶が保存される場所を探そうとしても無駄である。というのも、記憶は外部から私に呼び起こされるからである」<sup>②)</sup>、そして、「人が想い出すのは、自分をつないし多くの集団の観点に身を置き、そして一つないし多くの集合的思考の流れの中に自分を置き直してみるという条件においてである」<sup>③)</sup>と述べる。アルヴァックスは、記憶は個人の「脳」や「心」のなかにあるのではなく、「集団」や社会といった現在の自分を取りまく「外部」から呼び起こされるものと捉え、そのような記憶のあり方を集合的記憶と称した。さらに、「社会は、諸個人を分裂させたり諸集団を互いに引き離したりする可能性のあるものはすべて記憶から消す」と指摘し、想起と忘却の密接な関係を示唆する<sup>④)</sup>。

近年では、アルヴァックスの議論を引き継ぎながら、記憶のポリティクスという面から集合的記憶についてさらに検討をおこなっている研究もみられる。アルヴァックスは歴史を「人為的なもの」と捉え、記憶を人為的ではない、いわば自然なものとして対置する<sup>⑤)</sup>。しかし、テッサ・モーリス＝鈴木は、「個の記憶のなかにも、国民の歴史的過去の生きた痕跡があふれているはずである」と述べ、歴史と記憶の二分法に疑問を投げかける<sup>⑥)</sup>。森村敏己も、「自然なも

の、自発的なものととらえることで、集合的記憶が人為的な操作によって構築され、作り変えられるという面が軽視されているように思われる」と指摘する<sup>79)</sup>。

以上のようなアルヴァックスの議論とその先行研究をふまえると、集合的記憶とは、社会的文脈との関わりのなかで想起される記憶やその回路を指し、そこには政治力学による想起と忘却の問題があるといえる。たしかに、第二次大戦後の阿見町においても想起と忘却の力学が働いたが、さらに記憶の形成過程を掘り下げてみると、そこにはそれらをめぐる曲折した様相が垣間見える。すなわち、想起と忘却の境界は自明なものではなく、そこには何らかのジレンマが存在していたのではないだろうか。本稿では、具体的な事例に即しながら、集合的記憶における形成のプロセスを子細に検証したい。

そこで、本研究の対象である第二次大戦後の予科練に目を向けると、回顧録などを含めれば、関連する文献は数多くみられる。しかし、教育史的観点からの研究蓄積はあまりなく、特に予科練の戦後史に言及したものはほとんどない。ただ、阿見町に着目すると、渡邊邦弘が、第二次大戦後の戦争記念碑について調査し、阿見住民などが「薄れゆく記憶」として、予科練が「伝えられる記憶」として位置づけられていることを明らかにしている<sup>80)</sup>。しかし、それらが形成された経緯や背景については不分明な点が多く、特に形成過程のなかでどのような議論があり、それを経てどのような記憶が忘却されていたのかについては十分に検討されていない。

以上のような先行研究の課題をふまえて、本論では、まず、阿見町の地域変容、特に敗戦後の軍国日本から平和日本への転換が、1950年代の警察予備隊武器学校の移駐による「軍都」再編成にどのように結節していったのかをみていく。次に、そのような地域変容との関係に着目して、1950年代に海軍航空殉職者慰霊塔が、1960年代に予科練之碑が建設された経緯や背景を検討し、そのなかで何が想起されたのか／忘却されたのかを明らかにする。詳しくは本論において述べるが、予科練之碑は、予科練の戦死

者すべてを慰霊するために建てられた戦後初のモニュメントであり<sup>81)</sup>、その建設は、予科練をめぐる集合的記憶の形成におけるメルクマールとなった可能性が高い。なぜならば、森村が集合的記憶と視覚表象の相互補完性を論じたように<sup>82)</sup>、戦争モニュメントの建設は集合的記憶の形成と密接な関わりをもっているからである。最後に、集合的記憶の形成とそれによる忘却を枠づけた阿見町の構造と特質について考察する。

## 1. 予科練と阿見町の概略

### (1) 予科練の沿革と概要

予科練は、海軍志願兵令改正（勅令第392号、1929年）によって、海軍志願兵に「航空兵」が加えられ、海軍志願兵令施行規則改正（省令第11号、1929年）により、その志願年齢が「15年以上17年未満」とされたことが、そのはじまりとなっている<sup>83)</sup>。1930(昭和5)年には、高等小学校卒業程度の学力を指標とした学力試験などによって、志願者5,807名から79名が選抜された。

発足以降、戦争形態の変化とともに、以上のような志願年齢や教育内容なども変更されていく。なかでも注目されるのは、海軍志願兵令施行規則改正（省令第9号、1937年）によって、従来の「飛行予科練習生タルコトヲ志願スル航空兵」が「甲種飛行予科練習生タルコトヲ志願スル航空兵」（志願年齢16年以上20年未満）と「乙種飛行予科練習生タルコトヲ志願スル航空兵」（志願年齢15年以上18年未満）に分けられたことである。主に中学校在学者から選抜した甲種予科練習生は、養成期間の短縮を目的に発足し、修業期間は乙種予科練習生の2年4ヶ月に対して1年2ヶ月とされた。その後、1940(昭和15)年に海軍内部から選抜した者からなる丙種予科練習生が、1942年に17歳以上の乙種予科練習生から選抜した乙種（特）予科練習生がそれぞれ発足し、入隊者数も急速に増加していく。敗戦までに、約240,000人が入隊、約24,000人が戦地に行き、約19,000人が戦死した。

### (2) 航空隊の設置

日露戦争以後に航空兵力に対する需要が高ま

ると、1917(大正6)年には水陸両用の飛行場を開設する必要性が海軍省によって提唱された<sup>(12)</sup>。すると、1919(大正8)年に阿見原80万坪と霞ヶ浦湖岸5万坪の買収が決定し、1921(大正10)年には霞ヶ浦飛行場が開設された。これにより、1922年に霞ヶ浦海軍航空隊が開隊し、阿見村は「日本でも有数の海軍の街」として歩みはじめた。1931(昭和6)年までに、霞ヶ浦海軍航空隊とその飛行場は、当時の日本海軍航空隊17隊半の4割強にあたる7隊半を有する「東洋一の航空隊の基地」へ拡大している。そのようななかで、海軍志願兵令改正(勅令第76号、1939年)により、予科練習生は横須賀海軍航空隊から霞ヶ浦海軍航空隊に移転した。これに続けて、海軍志願兵令改正(勅令第724号、1940年)によって、新たに開隊した土浦海軍航空隊に予科練習生が入隊することになる。『阿見と予科練』によれば、岩国海軍航空隊や三重海軍航空隊など、全国の航空隊において予科練習生への教育・訓練が開始したものの、「阿見が予科練教育の中心的存在であることに変わりなかった」とされている<sup>(13)</sup>。

このような航空隊の設置により、以前は「狐狸の棲家」といわれた阿見村は、急速に「海軍の街」へ変化していく。1920年代には阿見村や土浦市を通るバスや電車がそれぞれ開通し、茨城県初の舗装道路である「海軍道路」もできた。そのような交通網の発達とともに、多くの人々が航空隊による「発展」を予期して移住し、航空隊付近にはあらゆる商店が軒を並べた。『土浦市史』のなかに「軍都としての土浦の顔をみせるようになった」とあるように<sup>(14)</sup>、航空隊設置は隣接する土浦市にも変容を促すものであった。

航空隊が設置される前の1920年の阿見村は、農家率93.9%の純農村地帯であったが、その農家率は、65%(1924年)、52%(1935年)、36.4%(1944年)といったように低下していく。さらに、1944(昭和19)年の職業別戸数において軍関係が占める割合は43.6%にもなっていた。総人口も、3,892人(1920年)から10,502人(1944年)まで増加しており、航空隊設置による町の変容が如実に表れている。

## 2. 「平和的転換」—1940年代後半

以上のように阿見町は「海軍の街」として「発展」したため、軍関係施設を標的とした空襲にしばしばみまわれた。なかでも1945年6月10日の空襲は、軍関係施設の7～8割を壊滅させ、阿見住民から371名の死者を出した。

このような空襲もあり、敗戦後の阿見町においては、これまでの「軍の偉容」も「廃墟」となり「火の消えたようなさびれ方」をしていた<sup>(15)</sup>。荻野昌弘は、軍隊や基地の解体によって日本全土に「巨大な空白地帯」が生まれたと述べるが<sup>(16)</sup>、阿見町はまさにそのような空間だった。

この「空白地帯」は、まず、農地開拓に利用された。いまだ農業を主要産業のひとつとしていた阿見町にとって、農地開拓は主要な戦後改革のひとつであった。かつての広大な軍用地には、それまで軍関係施設に勤務していた者だけでなく、引揚者を含めた多くの入植者がきいている<sup>(17)</sup>。

次に、複数の教育機関を創設あるいは移転することで、「学都」構築が目指された。1946年、元霞ヶ浦海軍航空隊跡に霞ヶ浦農科大学が、元土浦海軍航空隊跡に附属農業学校が設立されている。茨城県出身の国会議員の中井川浩を中心とする地域の関係者が、「軍国主義国家」から「平和文化国家」への転換にふさわしい「学園都市建設」を構想し、大学設置を文部省に陳情した。文部省に対する設立申請からわずか3ヶ月で認可が下り、霞ヶ浦農科大学が誕生した。しかし、資金調達の困難によって1949年に県へ移管されて茨城県立農科大学となり、1952(昭和27)年には国の管轄下におかれ茨城大学農学部として再編成された<sup>(18)</sup>。

さらに1946年、戦災で施設を失った日本体育専門学校が、その「再出発」を「より施設条件のよい土浦において企図し」て、深沢から元土浦海軍航空隊跡へ移転してきた。新学制にもとづき、1947年に常陽中学校が、1948年に常陽高等学校がそれぞれ併設され、1949年には日本体育大学へ昇格している<sup>(19)</sup>。

同じように、1945年8月の空襲により焼失した茨城師範学校の男子部が、11月に元海軍気象

学校跡に移転された。それによって、水戸市にある男子部附属水城小中学校と女子部附属愛宕小中学校が師範学校から離れてしまったため、阿見小学校が1947(昭和22)年に代用附属小学校として文部省から委託された。この時代は「『新しい時代』を『新しい教育』で築きあげるといった教師たちの、たくましい創造的・実践的エネルギーが最も漲った時期」とされ、これを機に阿見町は「海軍の街」から「教育の街」へ転換が図られたといわれる<sup>(20)</sup>。

このような地域変容から、荻野は「軍用地が転用され、『文化』(文教施設)や『産業』に関わる建造物が建てられ、軍隊の痕跡が消えることによって、ようやく、阿見町の戦争が終わりを告げたといえることができる」と述べる<sup>(21)</sup>。阿見町は「平和的転換」をしたと別言することもできるが、それは必ずしも戦争をめぐる集合的記憶が阿見町において忘却されたことを意味するものではなかった。

1949年には君原村戦没者合祀之碑が建てられおり、その後も、1951(昭和26)年に阿見町戦没者合祀之碑、1952年に戦没者慰霊之碑(朝日村)、1953年に忠霊塔(舟島村)といった戦死者の慰霊碑が断続的に各町村に建設された<sup>(22)</sup>。慰霊の対象とされた戦死者は各町村の住民であったため、予科練習生のような航空隊関係者に限定されたものではなかった。だが、阿見町における戦争と予科練は住民にとって切り離して考えられるものではなかった可能性が高いため、このような慰霊碑の建設が予科練をめぐる集合的記憶の形成に与えた影響は少なくなかったと思われる。

また、時期をさかのぼると、各航空隊には戦死者を慰霊するモニュメントが存在していた。たとえば、1926(大正15)年、海軍航空隊の戦死者を慰霊するために、霞ヶ浦海軍航空隊内に霞ヶ浦神社を建設し、かれらを「英霊」として扱った。1943年には、山本五十六の像が土浦海軍航空隊内に建てられている。山本は、1924年に霞ヶ浦海軍航空隊の副長に着任し、教頭職も兼務していた。約3.6mの全身像は、台座も含めると約6.3mの高さがあった。

敗戦後におけるそれぞれのモニュメントのゆくえを検討するにあたり、まず全国的な状況を確認すると、1945年に占領軍からいわゆる神道指令が出され、各府県でも公有地にある忠魂碑の撤去などが布達されていた。そのようななかで、山本五十六像は、占領軍の進駐に先立ち、土浦海軍航空隊工作兵が二つに切断し、霞ヶ浦に沈めたという。霞ヶ浦神社も、占領軍が破棄を命じると、名簿は民家に分散秘匿され、社殿は近くの神社に移された<sup>(23)</sup>。

ほとんどの住民が戦争体験者だったこの時期に、霞ヶ浦神社や山本五十六像の消失によってすぐに航空隊をめぐる記憶が忘却されていったとはいいがたく、その影響は後の時代における記憶の形成におよぶと思われる。だとすれば、これらのモニュメントが復活することによって記憶が再構成される可能性も残されていたといえる。

### 3. 「軍都」再編成——1950年代

#### (1) 警察予備隊武器学校の移駐

このように阿見町は、農地開拓と「学都」構築を軸とした「平和的転換」を図ったものの、1951年になると、その象徴のひとつであった日本体育大学が総定員の半数にも満たない状態になったため、再び深沢へ移転した<sup>(24)</sup>。茨城師範学校も、1947年に土浦市へ移転、1951年には代用附属小学校とともに廃校にいたっている<sup>(25)</sup>。「平和的転換」にややかげりがみえるなかで、警察予備隊武器学校が1952年に立川市から移駐され、1953年には隣接する土浦市に霞ヶ浦駐屯地が開設されている。

荻野は、これらの施設がおかれたのは町の中心部ではなかったことや、阿見中学校や茨城大学農学部といった「文化」が町を「支配」していたことから、「阿見町の風景は、戦後『変身』を遂げたのである」と述べる<sup>(26)</sup>。しかし、はたしてそこまでいきれるのであろうか。1950年代における武器学校の移駐は1940年代後半の「平和的転換」とどのような関係をむすび、当時の阿見住民はそれらをどのように捉えていたのだろうか。そこで以下では、『常陽新聞』から武

器学校の移駐過程を検証する。同紙は、1948（昭和23）年に『豆日刊土浦』として創刊、『常陽新聞』に改題されてからも両面刷1枚の紙面に県南の情報を中心に掲載している。『地方別日本新聞史』は、敗戦後に茨城県内で誕生した60余の新聞のひとつとして位置づけている<sup>(27)</sup>。

当時、阿見町長を務めていた丸山銑太郎は、常陽新聞社が1952（昭和27）年8月25日に開いた座談会において、司会から「非常に予備隊が自然にやつて来たのか、あるいは誘致運動をしたのか」と質問されると、「基本は前に第一次誘致運動もやりましたのでそれが基本となつてゐることは事実です」と答えた。丸山は、警察予備隊創設のニュースを聞くと、すぐに東京に行き担当大臣に誘致を打診したという。ただ、茨城県が「本腰」を入れた勝田市に駐屯地が開設されたため、「第一次誘致運動」は頓挫している<sup>(28)</sup>。しかし、1952年1月27日付の『常陽新聞』では、警察予備隊本部が元土浦海軍航空隊跡の実地調査をおこなっていることが取り上げられ、再び誘致の可能性が浮上した。同記事は、「（誘致：引用者注）実現の暁には土浦をはじめ阿見町の経済めんのうるおいが出来るわけである」と報じており、すでに移駐による経済効果に注目していた<sup>(29)</sup>。

これ以降、阿見町では「予備隊景気」がクロージアップされていく。「予備隊景気」に関する記事をまとめた表1にもあるように、武器学校のための下請け産業や「御用商人」を中心とした多くの飲食店や商店が軒を並べ、「特需工場」も操業されるなかで、土地や家屋の価格が急激に上昇している。紙面の具体的な文言をおってみると、「終戦後六年間の沈滞した空気から、変貌しつつある阿見町、」には、「復興のきざしははつきりとみられ」、「かつての軍都を漠然と夢みる町民」も現れたという<sup>(30)</sup>。武器学校の移駐を動力とした「復興」という地域変容が記憶としての「軍都」を再構成し、そのような想起を経て「予備隊景気」に対する期待も高揚していたと考えられる。

実際に移駐されるまえに、このような「予備隊景気」が期待される背景には、「終戦後六年間

表1 「予備隊景気」関連記事一覧

月	日	面	見出し
3	30	1	制服など大量注文／予備隊景気で活気づく土浦産業界
4	15	1	新設阿見武器学校の構想／生徒三千名を収容／一億数千万円で五月着工
4	19	2	風俗営業許可願が続出／料理屋四件／パチンコ屋十二件／阿見に武器学校景気
4	30	2	読者の声／阿見の発展と武器学校
5	2	1	阿見武器学校と御用商人／慰安クラブ表面化／活発な飲食関係業者
5	6	2	読者の声／武器学校と飲食街
6	1	1	市商工部委員立川視察／東京の業者が続出／マチの女ざつと二千名
6	23	1	阿見に予備隊景気／早くも特飲街出現／土地は十倍、家屋が二倍
8	2	1	阿見に特需工場／工員八百名で近く操業
8	4	1	予備隊ブームに沸く／国道筋の水田一躍二倍
8	21	1	阿見のプロフィール／予備隊進駐で変貌／人気ある丸山町政
9	8	2	躍進阿見町に訊く／本社主催座談会／(5)／予備隊員の福利施設／町発展のために完備
9	13	2	躍進阿見町に訊く／本社主催座談会／(10)／娯楽場をふやす／人口二万以上に膨張か

注1)『常陽新聞』（1952年分）から筆者作成。

の沈滞した空気」があったと考えられるであろう。たとえば、戦後改革としての農地開拓のゆくえに着目すると、阿見町においては1,800戸のうち800戸は農家であり、そのうち約50%は「零細農」であった<sup>(31)</sup>。荻野もいうように、「旧軍用地のなかでも飛行場や演習場として使用されていた土地」は、「農業生産にはまったく向かない土地」であったため<sup>(32)</sup>、元土浦海軍航空隊や元霞ヶ浦海軍航空隊の跡地を開墾することも困難であったと思われる。すでに述べたように、1950年代に入ると、日本体育大学や茨城師範学

校も阿見町から消え、「学都」としての性格も薄くなっていた。敗戦後の「平和的転換」は頓挫し、さらに、それが倒錯するかたちで1950年代に「軍都」再編成へむかったのである。

しかし、1952(昭和27)年において、これまでたどってきた大勢とは異なる動きも見え隠れしている。具体的にいえば、3月18日、土浦市の議会議員を務めていた飯島政雪が、「朝鮮人を含む共産党員三十三名」とともに市長を訪れ、「予備隊誘致運動絶対反対」を求めたのである<sup>(33)</sup>。この件を受けて、22日の土浦市議会定例会では、小城銀治郎議員が、市長を訪れる際にかれらが「神聖なるこの(土浦市役所：引用者注)議場」に「侵入」したことを問題視している<sup>(34)</sup>。さらに4月14日にも、「土浦市、阿見町の朝鮮人ら十四名」が丸山町長に面会し、「朝鮮人強制送還反対」と同時に、「警察予備隊武器学校設置反対」を主旨とする陳情書を提出している。この件について報じた『常陽新聞』は、「朝鮮人」のこのような動きについて、「早朝より警戒を行っていた土浦地区署の厳重な警戒に午後四時に平穩裡に解散した」と記事を結んでいる<sup>(35)</sup>。このような新聞や会議録のことはをつなぎあわせるとすれば、誘致に反対する者は、「侵入」してくる「警戒」すべき「共産党員」あるいは「朝鮮人」と目され、「軍都」を再編成する過程における阿見町の、いわば周縁におかれていた。

結果として9月15日に武器学校が移駐されると、『常陽新聞』は「予備隊の街阿見誕生」という見出しを掲げ、それを報じた。同記事では、「街には歓迎のアーチ、新らしくできた街路燈に日の丸の小旗のきなみにひらめく」、「これから保安隊の行方とともに人口一万たらずのこの町があゆむ姿の第一歩である」と書かれており、「軍都」再編成と阿見町の「復興」が強固に結びつけて描写された。そして、「旧海軍予科練の中心部がいきがえり」ともあるように、このような「予備隊景気」に対する期待は、かつての阿見町における予科練を想起させていた<sup>(36)</sup>。

1953年以降の『常陽新聞』をおってみると、武器学校に関する記事がみられなくなることがわかる。だが、10月1日の土浦市議会定例会で

は、武器学校移駐に反対した飯島が、霞ヶ浦駐屯地の開設について、「私は前の武器学校誘致についても絶対に反対して来たのでありますが、また、ここに再び土浦が軍事都市として開発されるということわれわれ断固として防ぎ止めなければならないと考えております」と訴えた<sup>(37)</sup>。

かつて航空隊設置によって「軍都」として形成された阿見町と土浦市が、再び「軍事都市」として「開発」されることに飯島は異を唱えた。飯島自身も「軍都」を想起していたものの、必ずしもそれは「復興」と結びつけたものではなく、むしろ「軍都」による危うさを想起していたといえる。

## (2) 海軍航空殉職者慰霊塔の設置

すでに述べたように、海軍航空隊の戦死者を慰霊する霞ヶ浦神社については、名簿は民家に、社殿は阿彌神社に移されていた。しかし、社殿は放置されたままであったため、「全く見る影もない残骸の姿」となっていた。そこで、1955年に、元海軍航空隊関係者たちは、新たな慰霊塔の建設を「最良の方策」として、海軍航空殉職者慰霊塔建設期成会(以下、期成会)を組織した。期成会は、元霞ヶ浦神社の跡地である茨城大学農学部の数地内に建設場所を考えていたものの、農学部の学生たちが建設に対する反対運動を起こした。元海軍航空殉職者慰霊塔奉賛会がまとめた『旧海軍航空殉職者慰霊塔の由来』には、「慰霊塔の建設は再軍備に結びつく、こんな理由で、激しい反対運動を起した」学生たちについて、「数次の接渉にも全く耳をかたむけようとしない頑迷さに、ほとほとあきれるばかりであった」と書かれている<sup>(38)</sup>。

一方、『茨城大学三十年史』によれば、1955年5月に農学部に了解を求めにきた期成会に対して、学校側は「直ちに応諾することはとうてい困難」と判断し、交渉は難航したという。結果的には、8月に農学部の数地外に候補地を決めた。だが、10月に期成会は、阿見町長の連名によって水戸財務部に払い下げ申請をおこなっていた。それを知った学生たちは、11月に反対の学生大会を開き、教授会も反対陳情書を水戸

財務部に提出した<sup>(39)</sup>。1955年11月6日付の『常陽新聞』によれば、学生たちは同月4日に慰霊塔建設反対運動実行委員会を結成している。5日には、期成会の代表であり土浦市教育委員長でもあった菊池朝三を訪れ、「理想的な学苑建設の破壊」、「同塔建設は再軍備を促進するものだ」と訴えた。それに対して菊池は「再軍備を促進するようなものでなく靖国神社にもまつられていない全国海軍航空殉職者の霊を慰めるもの」と反論するが、この日は結論がでないまま終わっている<sup>(40)</sup>。1955年11月22日付の『朝日新聞』も、慰霊塔設置について「軍国の亡霊がよみがえってきそうだ」と懸念しており、武器学校の移駐についても「予科練の軍都から地味な学都に……その町がいま、軍都復活のブームに乗りかかっているのだ」と報じていた<sup>(41)</sup>。学生たちの運動と新聞記事の文言を重ねあわせると、学生たちは、「平和的転換」によって構築された「学都」の成員として「軍国の亡霊」を想起したといえよう。

最終的には、町長の「特段の配慮」によって町有地の一部が割譲され、農学部敷地外の阿見町保育所前に慰霊塔が建てられることになった<sup>(42)</sup>。12月に開かれた慰霊塔除幕式には元海軍航空隊関係者だけでなく、阿見町長や土浦市長なども参加している<sup>(43)</sup>。それ以降、毎年慰霊塔前で開かれる慰霊祭などを通じて、海軍航空隊戦死者は「英霊」として想起されていたのではないだろうか。

#### 4. 「予科練の町」へ——1960年代以降

1950年代には、武器学校移駐や慰霊塔建設をめぐる随所に軋轢が生じていたものの、結果的に阿見町は「軍都」として再編成され、その過程のなかにかつての「軍都」やその中心的存在であった予科練を想起する語りがみられた。すると、元予科練習生や阿見住民のなかから、予科練の慰霊碑を建設する動きが徐々に現れる。

元乙種予科練習生の戦友会である雄飛会は、その主要なアクターのひとつであった<sup>(44)</sup>。第18期からなる「いっばち会」が1958(昭和33)年に元乙種予科練習生の会合を開いたことにより、

雄飛会は結成されている<sup>(45)</sup>。その後、元海軍中將の桑原虎雄を会長に据え、全国的な組織として整えられた。1963(昭和38)年には、会報『雄飛』を創刊したり、靖国神社にて第1回慰霊祭を開いたりして、その活動を拡大させている。雄飛会のこのような活動がきっかけとなって、元甲種予科練習生の甲飛会、元丙種予科練習生の丙飛会、元乙種(特)予科練習生の特乙会が結成された。

1964年になると、雄飛会、甲飛会、丙飛会、特乙会が結束して予科練没者慰霊碑建立委員会を立ち上げ、碑の建設に向けて本格的に動き出すようになる。当初は建設予定地として、①元横須賀海軍航空隊跡、②靖国神社、③富士の裾野、④陸上自衛隊武器学校の4つが考案されていた<sup>(46)</sup>。後で紹介する阿見町婦人会会長の古谷りんもふりかえるように、当初は防衛庁が所管する武器学校の敷地外、つまり、阿見町の町有地のなかに建設する可能性もあった。元乙種予科練習生であり当時は自衛官でもあった諸岡澄雄も、予定地決定までには「紆余曲折」の過程があったと回顧する<sup>(47)</sup>。初めから碑の場所は武器学校内あるいは阿見町内に決定されていたわけではなかったことを考えると、この時期は「予科練の町」＝阿見町という認識が確固たるものではなかったといえる。最終的に、元土浦海軍航空隊出身者からなる「いっばち会」の意向により、武器学校内に決定された。元第18期乙種予科練習生の堺周一は、阿見町婦人会や地元有力者との打ち合わせにより、1961年に武器学校の見学とヘリコプターの体験搭乗をしており、そのときの交流が武器学校内の建設につながったと示唆している。

武器学校内に建設地が決定した経緯と背景については不明な点が残されているものの、阿見町婦人会とその会長古谷りんが果たした役割は大きかった。古谷のライフヒストリーを概観すれば、1908(明治41)年に茨城県水海道市に生まれ、1940(昭和15)年からこの地に居住している。子どもに恵まれなかったこともあり、遊びにくる予科練習生の世話をよくしていた。敗戦後も、元土浦海軍航空隊跡を再訪してきた元予



科練習生たちを自宅に宿泊させ、当時のことを語り合った<sup>(48)</sup>。

古谷は、「社会の母」として町内各層からも広く慕われていた人物であり<sup>(49)</sup>、1964(昭和39)年3月には阿見町議会初の女性議員として「悠々上位当選」を果たしている<sup>(50)</sup>。碑建設との関わりでみると、古谷は婦人会会員とともに、武器学校に建設を打診したり、全国の婦人会に「十円募金」を呼びかけたりしていた。建設を打診した武器学校総務課長の山中から「いっぱち会」の存在を知ると、元予科練習生の組織と接点をもつようになる<sup>(51)</sup>。古谷は、後述する海原会から「予科練の母」として顕彰されている。古谷の思想形成を検討するための資料はほとんど存在しないが、2010(平成22)年に開館した予科練平和記念館には、2002(平成14)年に開かれた元予科練習生の集会で古谷が歌った漢詩が残されている。そこには、「風雲急告神州空／誠心国殉有此時／少年毗決大空踊／雄魂華散不復帰」と書かれている。かれらの死をナショナルな語りへ転換しようとしながらも、「不復帰」とその無念さを嘆く古谷の思想が垣間見える。

地域の婦人会とは、既婚女性を網羅的に組織する地縁団体であり、その活動は社会教育活動や奉仕的活動など多岐にわたる。阿見町婦人会の動向を新聞記事からたどってみると、1964年3月に「婦人の認識」を高めるために、会員40名が武器学校に「一日入隊」し、施設の見学や訓練の体験をおこなっている<sup>(52)</sup>。6月に開かれた婦人会の総会では、1964年度の活動目標のひとつとして、すべての民家に日の丸を掲げることを打ち出していた<sup>(53)</sup>。このように、婦人会を中心とする阿見住民が、碑建設のために「十円募金」をおこなったり、日の丸を掲げる運動に関与したりすることによって、予科練をめぐる集合的記憶が想起されていったと考えられる。

以上のような古谷や婦人会の活動もあり、予科練戦没者慰霊碑建立委員会のなかで予定地が定まる。次の段階として、各方面から集めた協力者の名簿を持参して、武器学校校長や防衛施設庁長官に借地を要求した。その際、「桑原会長の人脈、人柄、実行力には唯々感謝の言葉につ

き」るものであったという。防衛施設庁から許可がおりると、1965年6月には予科練戦没者慰霊碑建立趣意書と推薦者名簿を各方面へ発送した。推薦者として、防衛庁長官などの政界関係者、全日本空輸株式会社社長などの財界関係者、靖国神社宮司などの神宮関係者、さらに「若鷺の歌」を作曲した古関祐而が挙げられている。

1965年8月、鋤入れ式がおこなわれると、自衛隊協力のもと建設工事が開始された。式には、かつて期成会の代表として学生たちと対立した菊池朝三が、土浦市議会議長として参加している。予科練之碑が完成すると、1966年5月に予科練戦没者慰霊碑除幕式がおこなわれた。『予科練之碑除幕・慰霊祭式典報告書』には、当日の様子が次のように書かれている<sup>(54)</sup>。

その日の土浦は、二十年前にかえったようだった。土浦から阿見町への沿道の家々には日の丸がはためき、参列者輸送のバスは日章旗と軍艦旗を車腹に行き交う。四千近い人達が阿見町に集ったのも、戦後初めてのこと。このようにして予科練戦没者慰霊碑の除幕・慰霊祭は、高松宮同妃両殿下をお迎えし、厳粛かつ盛大に執り行われた。

翌日の新聞は除幕式について大きく取り上げており<sup>(55)</sup>、阿見町役場も「聖地霊域とも云うべき阿見町新名所が出来たことは、喜ばしい次第です」と報じた<sup>(56)</sup>。「二十年前にかえったようだった」という報告書の記述が示すように、予科練之碑が建てられ、その除幕式が開かれることによって、「予科練の町」を想起した者は少なくなかったのではないだろうか。たとえ碑を直接みなかったとしても、各種メディアを通じて記憶を再構成していったと考えられるだろう。建設予定地が複数あったこともふまえると、「予科練の町」＝阿見町という図式が記憶として再構成された点において、碑の建設が果たした役割は大きかったといえる。

予科練之碑の建設を画期として、予科練に関するモニュメントや記念館が次々に建設され、戦友会も拡大していった。阿見町に関連するも

のとして、1967(昭和42)年の第2回慰霊祭では、碑の管理のために予科練之碑保存顕彰会が設立され、これを機に予科練関係資料を展示する予科練記念館の建設に着手しはじめた。1968年に記念館が完成し竣工報告式がおこなわれると、2年前の予科練戦没者慰霊碑除幕式よりも多くの人々が参加した。1979(昭和54)年には、予科練之碑保存顕彰会から財団法人海原会が設立されている。この海原会が、敗戦直後に切断されそれぞれ異なる時期に発見された山本五十六像を、予科練記念館の入口付近に2004(平成16)年に新たに建設したのであった<sup>67)</sup>。このようにして、関連するモニュメントや組織が設立され、予科練をめぐる集合的記憶が想起される回路がさらに補強されていったといえるだろう。

おわりに——忘却のプロセスに着目して

ここまでみてきたように、予科練をめぐる集合的記憶は、1950年代の「軍都」再編成と1960年代の戦争モニュメントの建設を通じて、段階的に形成されてきた。それと同時に、段階的な形成過程のなかには、複数の集合的記憶が相互にせめぎあう様相も垣間見えた。以上のような二つの側面、すなわち、単一の集合的記憶が段階的に形成される過程と、複数の集合的記憶が相克する過程は、どのような関係にあったのだろうか。

相克の構造が顕著にみられた1950年代、「阿見住民」は「軍都」による「発展」を、元海軍航空隊関係者は「殉職者」という「英霊」を想起する一方、「共産党员」、「朝鮮人」、「学生たち」は、軍国日本の危うさを想起していた。「阿見住民」といえども、そこにはあらゆる集団や社会が存在し、それらの成員として想起された集合的記憶は複数におよぶ。そのため、複数の集合的記憶の相克によって記憶が再構成される可能性も残されていたのではないだろうか。つまり、第二次大戦後に再編成された「阿見住民」が「軍都」とは異なる地域変容を促し、それによって戦後ナショナリズム自体を問い直すこともありえたのではないだろうか。

しかしながら、第二次大戦後の「復興」とい

うモーメントが「平和的転換」の頓挫を介しながら「軍都」再編成を促し、同じ地域住民である「共産党员」や「朝鮮人」、さらに「学生たち」を異質な他者として「阿見住民」から排除していった。そればかりでなく、そのような排除を通じて、阿見町は「予備隊の街」、さらに「予科練の町」というイメージを形成し強化していったのではないだろうか。だとすれば、段階的な形成過程とそのなかに見え隠れする相克の過程は密接な関係にあり、一部の者を排除することによって「軍都」再編成が加速化し、そのなかで「発展」をもたらす「軍都」が想起されたといえる。

こうした「阿見住民」と「共産党员」のような非対称的な関係が構築された背景には何があったのだろうか。当時の阿見町の性格を再考するものとして、『常陽新聞』は武器学校移駐が間近に迫るころに阿見町を「植民地」と称している。同紙は「他の植民地的都市と同じく世の転変につれて栄枯盛衰する運命を免れることが出来ない」、その点において「阿見町の性格は本質的に（中略）植民地的である」と伝える<sup>68)</sup>。同記事は「阿見住民」が自発的に武器学校を受け入れながらも、それが状況依存的な性格を有していたことを示唆している。読者のなかには、武器学校移駐によって「住みよかつた街がハカイされるようなことがあってはならない」と危惧しつつも結果的には「軍都の再現はやむをえない」と妥協する者もいた<sup>69)</sup>。「阿見住民」の目の前には経済復興という課題があり、それを解決するためには戦後日本の再軍備の一翼を担わざるをえず、その遂行を通じて阿見町のナショナリズムが活性化されたと考えられる。

1960年代には、予科練之碑を建設するための運動が、婦人会を中心とした「阿見住民」や元予科練習生によって本格化する。しかし、『常陽新聞』などの地方紙や、阿見町や土浦市の議会会議録を調査しても、1950年代にあったような異質な他者からの動きはみられない<sup>69)</sup>。すでに「予備隊の街」として成立し、それによる経済効果が期待された阿見町において、かつて同様の「発展」をもたらした予科練を語ることに疑義を

はさむ余地はなかったと考えられる。言い換えれば、「軍都」阿見町における経済発展とナショナリズムは強固に結合されたため、1950年代にみられた武器学校や慰霊塔を「軍国の亡霊」としてまなざすような記憶は想起されず、忘却されていった。

本稿では阿見町に着目したが、元予科練習生自身はどのような戦後史をたどり、集合的記憶の形成にいかなる影響を与えていったのだろうか。特に、帝国日本・軍国日本から民主日本・平和日本への転換が図られた戦後初期に、かれらはどのような処遇を受け、そのことがその後のライフヒストリーをいかにして水路づけたのだろうか。この問いを明らかにするためには、敗戦後の日本政府や占領軍の政治力学を具体的に検証する必要がある、稿を改めて論じることにはしたい。

#### 注

- (1) 予科練は、法令上では「予科練習生」や「飛行予科練習生」と表記され、志願区分や時期によっては「少年飛行兵」とされたこともある。本稿は想起される記憶が主題であるため、さしあたり広範囲の人々が使用した予科練を用語として用いる。だが、予科練という呼称が一般的なものとなった経緯や背景については未解明な点が多く、検討を要する課題である。
- (2) Halbwachs, M., translated by Coser, L. A., "The Social Frameworks of Memory", Halbwachs, edited, translated, and with an introduction by Coser, *On collective memory*, University of Chicago Press, 1992, p. 38 (Halbwachs, M., *Les cadres sociaux de la mémoire*, Presses Universitaires de France, 1952).
- (3) M. アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、19頁 (Halbwachs, M., *La Mémoire collective*, P. U. F., 1950)。
- (4) Halbwachs, op. cit., pp. 182-183.
- (5) 前掲『集合的記憶』86~93頁。
- (6) テッサ・モーリス＝鈴木著、大久保桂子訳「グローバルな記憶・ナショナルな記述」『思想』第890号、岩波書店、1998年、44~45頁。

- (7) 森村敏己「歴史研究における視覚表象と集合的記憶」森村敏己編『視覚表象と集合的記憶——歴史・現在・戦争』旬法社、2006年、22~23頁。
- (8) 渡邊邦弘「戦争の記憶——茨城県阿見町を事例に」『茨城地理』第8号、茨城地理学会、2007年、23~33頁。最近の研究として、第6回戦争社会学研究会大会(2015年4月15・16日)で、清水亮は「海軍航空隊をめぐる地域の記憶のトポグラフィ——茨城県阿見町を中心に」と題した発表をおこなった。
- (9) 小池猪一編『海軍飛行予科練習生』(第2巻、国書刊行会、1983年)の「慰霊碑・記念碑総覧」(375~420頁)には、予科練に関する日本各地の慰霊碑や記念館がまとめられているが、そのなかでも予科練之碑は最も早い時期に建設されている。
- (10) 前掲「歴史研究における視覚表象と集合的記憶」25~31頁。
- (11) 以下、予科練の沿革と概要については、小池猪一編『海軍飛行予科練習生』(第1巻、国書刊行会、1983年)を引用・参照した。
- (12) 以下、注によることわりがないかぎり、霞ヶ浦海軍航空隊と土浦海軍航空隊に関係する阿見村の沿革については、阿見町史編さん委員会編『阿見町史』(阿見町、1983年、519~547頁)を引用・参照した。なお、明治期に成立した阿見村は、1945年5月の町制施行により阿見町となり、1955年には、朝日村、君原村、舟島村を合併した。
- (13) 予科練史編纂委員編『阿見と予科練——そして人々のものがたり』第4版、阿見町、2008年、89頁。
- (14) 土浦市史編さん委員会編『土浦市史』土浦市史刊行会、1975年、877~878頁。
- (15) 松本良隆・河野辰男・平輪光三・関浩郎編『阿見町の生い立ち』阿見町役場、1968年、58頁。
- (16) 荻野昌弘『開発空間の暴力——いじめ自殺を生む風景』新曜社、2012年、5頁。
- (17) 前掲『阿見町史』673~685頁。
- (18) 茨城大学五十年史編集実行委員会編『茨城大学五十年史』茨城大学、2000年、377~379頁。

- (19) 学校法人日本体育会日本体育大学八十年史編集委員会編『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』学校法人日本体育大学、1973年、817～864頁。
- (20) 前掲『阿見町史』654、660～663頁。
- (21) 前掲『開発空間の暴力——いじめ自殺を生む風景』5頁。
- (22) 前掲『阿見と予科練——そして人々のものがたり』314～317頁。
- (23) 予科練平和記念館資料収集委員編『続・阿見と予科練——そして人々のものがたり』阿見町、2010年、6～9、105～107頁。
- (24) 前掲『学校法人日本体育会日本体育大学八十年史』876～877頁。
- (25) 前掲『阿見町史』654頁。
- (26) 前掲『開発空間の暴力——いじめ自殺を生む風景』5頁。
- (27) 日本新聞協会編『地方別日本新聞史』日本新聞協会、1956年、76～77頁。
- (28) 「躍進阿見町に訊く／本社主催座談会／(4)／予備隊に持つ期待／誘致運動は三年前から」『常陽新聞』1952年9月7日、第2面。
- (29) 「予備隊施設の誘致有望／実地測量で係員が阿見へ」『常陽新聞』1952年1月27日、第1面。
- (30) 「阿見に予備隊景気／早くも特飲街出現／土地は十倍、家屋が二倍」『常陽新聞』1952年6月23日、第1面。
- (31) 「躍進阿見町に訊く／本社主催座談会／(6)／非常に多い零細農／商工業者の協力が必要」『常陽新聞』1952年9月9日、第2面。
- (32) 前掲『開発空間の暴力——いじめ自殺を生む風景』34頁。
- (33) 「予備隊誘致は反対／飯島市議等市長に要求」『常陽新聞』1952年3月19日、第1面。飯島政雪(1899～1972)は51歳のときに唯一の日本共産党議員として当選し、1951年から1955年まで務めた。1955年、1959年に再び出馬したものの、落選に終わっている(土浦市議会議会史編さん特別委員会編『土浦市議会五十年のあゆみ』土浦市議会、1990年、114、179～180、232～245頁)。
- (34) 『土浦市議会会議録』第61号(昭和二十七年(三月)第三回土浦市議会定例会会議録 第一号)、土浦市議会事務局(土浦市立図書館蔵)。
- (35) 「強制送かん反対など／朝鮮人ら阿見町朝日村に陳情」『常陽新聞』1952年4月15日、第1面。
- (36) 「歓迎攻めの第二夜／予備隊の街阿見誕生」『常陽新聞』1952年9月18日、第1面。
- (37) 『土浦市議会会議録』第97号(昭和二十八年(十月)第六回土浦市議会定例会会議録 第二号の三)、土浦市議会事務局(土浦市立図書館蔵)。
- (38) 田沼保次『旧海軍航空殉職者慰霊塔の由来』元海軍航空殉職者慰霊塔奉賛会、9、13頁(予科練平和記念館蔵)。同書は20頁程の小冊子であり、記述内容から1970年代から1980年代までの間に作成されたと推定される。
- (39) 茨城大学三十年史編集委員会編『茨城大学三十年史』茨城大学、1982年、385～386頁。茨城大学10年史編集委員会編『茨城大学十年史』(茨城大学、1960年)と、前掲『茨城大学五十年史』のなかに、海軍航空殉職者慰霊塔の建設に関する記述はない。
- (40) 「学生代表と話し合い／海軍航空殉職慰霊塔建設問題」『常陽新聞』1955年11月6日、第1面。
- (41) 「整えられぬ教授陣／茨城大学の場合／学生は「軍都復活」と闘う」『朝日新聞』1955年11月22日、第5面。
- (42) 阿見町民話調査班編『爺さんの立ち話——阿見原と海軍にまつわる話ほか』第2集、阿見町、2009年、43～44頁。
- (43) 「海軍航空殉職者慰霊塔除幕式／きのう阿見町で挙行」『いはらき』1955年12月19日、第2面。
- (44) 以下、注によることわりがないかぎり、雄飛会や予科練之碑建設の動向は、元乙種予科練習生の堺周一が2011年に著した『予科練戦後の歩み——紺碧の青空のもと窓英霊よ永遠に安かれ』(予科練平和記念館蔵)を引用・参照した。本書で堺は雄飛会の戦後史を50頁程にまとめている。
- (45) 予科練初代部長の市丸利之助は1933年に雄飛会を結成した。会報『雄飛』も発行していたが、1941年には解散している(倉町秋次『予科練外史』1、予科練外史刊行会、1987年、204～213頁)。

- (46)「富士の裾野」は静岡県駿東郡裾野町（現裾野市）が想定されるが、予定地とされた理由は不明である。同じ静岡県駿東郡の小山町には陸上自衛隊富士学校があったため、そこが予定されていた可能性もある。
- (47)「創立十周年特別座談会 阿見町民・雄翔園を語る 第1回」『月刊 予科練』第140号、海原会、1988年、5～6頁。
- (48)前掲『続・阿見と予科練——そして人々のものがたり』55頁。
- (49)「水戸地裁調停委員に阿見町古谷りん氏」『常陽新聞』1964年2月8日、第2面。
- (50)「現役八人が落選／阿見の新町議さまる」『常陽新聞』1964年3月28日、第1面。
- (51)前掲「創立十周年特別座談会 阿見町民・雄翔園を語る 第1回」4～5頁。
- (52)「お母さんお姉さん／自衛隊に一日入隊」『常陽新聞』1964年3月6日、第2面。
- (53)「全戸に日の丸を／阿見地区婦人会総会」『常陽新聞』1964年6月5日、第2面。
- (54)『予科練の碑除幕・慰霊祭式典報告書』1頁（予科練平和記念館蔵）。同書は予科練戦没者慰霊碑建立委員会が1966年に作成したと推定される十数頁の小冊子である。
- (55)「涙ぐむゝ同期の桜、ら／阿見の予科練戦没者慰霊碑／きのう盛大に除幕式」『常陽新聞』1966年5月28日、第1面。「高松宮ご夫妻招き／予科練の慰霊碑／阿見町で盛大に除幕式」『いはらき』1966年5月28日、第7面。
- (56)「〔阿見町の新名所〕予科練戦没者慰霊碑」『広報あみ』第44号、稲敷郡阿見町役場、1966年、3頁。
- (57)前掲『続・阿見と予科練——そして人々のものがたり』105～107頁。
- (58)「阿見のプロフィール／予備隊進駐で変貌／人気ある丸山町政」『常陽新聞』1952年8月21日、第1面。
- (59)「読者の声／住みよい街に」『常陽新聞』1952年8月21日、第2面。
- (60)予科練之碑建設に関与していた古谷りんは、当時阿見町議会議員を務めていたものの、阿見町議会史編纂特別委員会編『阿見町議会四十年

史』（阿見町議会、1996年）には、それに関する議論がみられない。筆者は、予科練之碑建設に関わる内容を含む会議録について、2015年4月23日付で公文書公開請求をおこなった。それに対して2015年4月28日付で阿見町議会議長より非公開の決定が通知されたが、その理由は「情報の不存在」であった。会議録のなかには碑に関する議論はないと判断した。

#### 【付記】

本稿は、筑波大学人間学群教育学類の2012（平成24）年度卒業論文「戦争をめぐる集合的記憶の形成過程——予科練はどう語られてきたか」に大幅に補筆および修正をおこなったものである。

また、予科練平和記念館所蔵資料の閲覧・複写に際しては、同館学芸員のご協力を得た。記して謝意を表したい。

# **Process of Forming Collective Memory concerning Yokaren: Focusing on Regional Transformation of Ami Town, Inashiki County, Ibaraki Prefecture after World War II**

Shinya SHIRAIWA

Ami Town, Inashiki County, Ibaraki Prefecture was the main area where *Yokaren*, which is an abbreviation for *Kaigun-hiko-yoka-renshusei* (Naval Aviator Preparatory Course Trainees), were educated and trained. In Ami Town after World War II, the collective memory concerning *Yokaren* which is based on the concept that memories are recalled in social and historical context has been formed through building monuments. The purpose of this paper is to clarify the process of forming collective memory concerning *Yokaren*, focusing on the regional transformation of Ami Town after World War II.

The collective memory has been formed gradually. In the 1950s, when Ami Town was reorganized as a “military city” through an invitation to the National Police Reserve Ordnance School, the former “military city” including *Yokaren* was remembered. In the 1960s, the residents and former *Yokaren* established monuments and held memorial services for the war dead. Therefore, a method for remembering *Yokaren* was established. At the same time, collective memory sometimes conflicted with each other in the gradual process of forming an overall collective memory. However, because of asymmetric relationships, memories recalling the dangers of militaristic Japan were discarded and forgotten while the collective memory regarding *Yokaren* as “*Eirei*” (national spirits of the war dead) became the predominant form of recollection.

The background to this process involved the problem of relating to the structure and characteristics of Ami Town. There was a serious problem of economic reconstruction because Ami Town had been ruined in defeat. Reorganization as a “military city” was the only plan for solving this problem, thus the only recourse for residents was to assume an obligation of national rearmament. As a result, economic development of Ami Town and postwar nationalism became inextricably linked. Accordingly the collective memory concerning *Yokaren* has been formed.